

## 左右の口唇閉鎖力を調べると分かる事     パタカラ開発者 歯学博士 秋広良昭

① 測定時の数値は測定当事者だけでなく、患者家族の気持ちも確実に変化をさせます。

口唇は脳神経の支配下の下に動くので「脳の働き状況」を推測する事もできます。

左右がほぼ同様な数値であれば左右を支配している脳には先ず問題はありません。

左右がほぼ同じ数値で口唇閉鎖力が弱ければ「口唇の働き」そのものが弱い事を示しますので、取り敢えず強化のために口唇機能活性化のための口唇ストレッチをする必要があります。口唇閉鎖力はリハビリ開始前とその後の改善効果の有無も数値で示されます。

② 左右の口唇閉鎖力に違いがあった時には、事故による障害か、脳の片側に病気を生じ、その部位の脳の働きに問題が生じており、その程度によって反対側の身体の筋組織の働きに機能麻痺を含む障害が起こります。少しでも麻痺があるとその反対側の支配下部位は麻痺を起こします。何か脳に問題(大きな脳血管疾患や極々小さな疾患迄)がある事を示唆いたします。

右側の脳に問題があれば左側の口唇(左側全体に麻痺があってもなかなか一目瞭然とはいきません)に脳の麻痺の状況に応じて麻痺が現れます。症状は後述致しますが典型的な症状でないと見落としがちです。しかし数値でその差が比べられると話は違います。先生方には「数値がこれこれこうですからこうですよ」と患者・家族に自信を持って話す事が出来る強みが生まれるとともに、患者家族から先生への信頼の向上に繋がるのでさらに後々の治療にも繋がります。

③ 隠れ脳梗塞で全く発症に気付かないほど軽症であったのは幸運そのものと言えます。

起きた脳血管疾患の程度で重症から極々軽度まで疾患の程度と機能障害の状況も様々です。

しかし脳梗塞を起こしたことに変わりはありません。重症であれば症状も重症化なので、脳血管疾患が起きた事を見落としますが、反対に極軽度の脳血管疾患ならば、その麻痺等による機能障害は軽く、不自由を感じない事まであります。多くの人は医療に関し素人ですから、時として脳血管疾患が起きた事すら気付かない『隠れ脳梗塞』の人が多数いると言われていています。

極軽い脳梗塞で気付かずに過ごしていた人でも、これからは既往症の有無を知るために身

体の左右に筋弛緩の有無を調べておく必要があります。左右差があれば、それは軽度であっても脳に何か問題が起きている可能性があると思えるべきでしょう。